



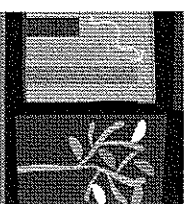
「振り所となる言葉こそ人生の支え」 ～マラソン高橋尚子さんの言葉から～

ある番組で、脚本家の倉本聰さんと対談するマラソンの高橋尚子さんの言葉に興味をひかれた。高橋さんは、もともと有望選手とはいえなかった自身の生き方を振り返り、よき指導者との出会いとその指導者から得た「振り所となる言葉」を挙げていた。

次の3つの言葉をいつも携え、人生を確かに送る上での支えとしているそうである。

1 「花の咲かない寒い日は、下へ下へと根を伸ばせ」

下積み生活を支えてくれる言葉。不遇時代に光をあててくれる言葉。もしかしたら、この光はあたらず陰の部分であっても、しっかりと頑張ったり、あきらめずに取り組んでいる、この時こそが財産だということ。人は、いつできるようになり、いつ飛躍的にできるようになるのか、それぞれに異なり、計り知れないものである。



2 「疾風に頸草を知る」

さて、下積み時代を経た高橋さんの芽吹いた後の生き方。「疾風」は速く吹く風。「頸草」とは強い草のこと。「逆境に直面した時こそ、その人の真価が問われる」ということ。困難に対処するには、心豊かでしなやかな生き方が望まれる、と高橋さんも述べている。

3 「満月はひと夜しかない」

頂点を極めた高橋さんならではの言葉。頂点を極めた後、満月の後は少しずつ欠けていく。このことは必然だが、その後の人生こそが重要であること。高水準の力量を相変わらずのモチベーションで維持し続けることは難しく、何らかの視点の交換や発想の転換が必要らしい。

さて、先のオリンピックでは、地元の重友選手が力及ばず、残念な結果に終わった。解説者は、「今や、高速化の時代。日本人選手にとって、大変困難な時代。」と評した。あるアナウンサーは「高橋選手、野口みづき選手のような一流選手を育てる必要がある。」と辛辣な評を残した。まさに、高橋さんならどう対応するか。野口さんならどう即応するか、考えてみたいものだ。両選手の高地トレーニングは、高速化の緒についていた時代のこと。時代を先取りし、牽引していた。

白梅祭を終えて、今すべきこととは…

～ 受験は佳境に入った！ ～

いよいよ、高速化は必須課題と言った。時代は情報化基盤型社会であり、あふれる多くの情報の処理が問われる時代。センサー試験も同様。校内の中間考査や期末考査、課題考査とは質が違う。はじめて目にする課題にどう対応するか。意識が常にそこにあつてこそ、対応ができる。

もちろん、センサー試験以外の入学試験や就職試験。これもまた同様に、個別の特性に即応し対策を効果的に行う、意識が備わっているかどうかにかかっているはず。

さて、みなさんは、それぞれの目標・到達点に向かって、今こそ現実的な対応を行う。まさに、その佳境期に入ったのです。健闘を祈っています。